

## 関西鉄道 ⑤ 桑名駅まで開通

西羽 晃

桑名仮駅の開業から10ヵ月ほど経った、明治28（1895）年5月24日に桑名駅は現在の場所で開業した。大字東方の一部で耕作権の交渉が難航したため、開通までに若干の日時を要したようである。

桑名仮駅から桑名駅までの途中は線路が弓なりに湾曲している（前回の添付地図）。これは桑名本郷の集落を避けたためと思われる。現在の北勢線（西桑名2号）・JR関西本線（構内）・近鉄（益生4号）の「三線踏切」の内のJR踏切は、本郷の耕作道が線路を横切るため、開通当時に出来たものと思われる。もっとも当時は遮断機も警報機もない踏切であったろう。

一方、名古屋からの線路も前ヶ須（現・弥富）まで進み、桑名駅と同時に前ヶ須・蟹江駅も開業した。3駅ともプラットホームの基壇にはレンガが使われているのが、現在でも見られる。

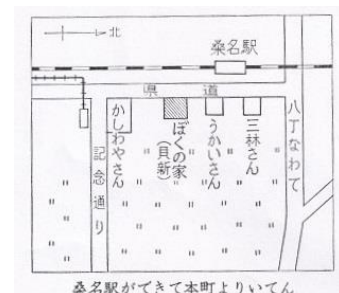
前ヶ須と桑名との間にある木曾川、揖斐長良川の鉄橋は未完成であったので、両川は無賃の渡船で結び、沿岸までの陸路は有料の人力車が配置された。



明治28年5月24日『伊勢新聞』



駅ができる前（『私たちの桑名市』



駅が出来てから（同右）

桑名は東海道の宿場であったが、桑名駅は町はずれの田圃の中に出来た。一説には鉄道ができるまで宿場がさびれるので、鉄道に反対したからとも言われる。しかし、南から来た東海道は矢田で直角に曲がっており、曲がらずに真っ直ぐに延長した場所で、美濃街道・八丁畷で桑名町の中心と結ぶ地点が選ばれたと思われる。さらに三大川の鉄橋は長さを短くしたいし、対岸の長島・前ヶ須への連絡位置も考慮されたと私は思う。

八丁畷は桑名藩主の松平家の菩提寺である照源寺に行く道で、桑名の主要な道路であった。美濃街道との分岐点である堤原には江戸時代から「右みの多度みち」の道標と常夜燈が建っていたが、駅が出来たので、道標に「左すてんしよみち」の文字が彫り加えられたと思われる。「すてんしよ」とは英語の「ステーション」である。この道標と常夜燈は市民に親しまれ長らく建っていたが、住宅建設の邪魔になるので、平成 27（2015）年に撤去された。



「すてんしよみち」道標（昭和初期頃の堤原）

田圃の中に出来た駅の付近には貝新（時雨屋、水谷新左衛門家）、江戸屋（旅館・運送、鵜飼家）、三林食堂、長谷川運送店が出来た。うち、江戸屋は七里の渡し場近くの川口町で旅籠の「江戸屋」を営んでいたが、分家が駅前に進出した。旅館は昭和 6（1931）年に廃業した。しかし、その後も永く駅売店を営んでいた（鵜飼史郎著『シロー物語』第一部青春篇 1994 年刊）。